

信仰：女性祭司 ノロ

奄美大島が琉球王国の一部となった 15 世紀後半以降、この島の集落生活における信仰的な側面は、「ノロ」と呼ばれる王府によって任命された集落の女性祭司が主導するようになりました。ノロは集落の繁栄を求めて神と交信する務めを持ち、一種の宗教的な行政官としての役割を担っていました。宇検村にある資料室では、1594 年に琉球国王がノロを任命した際の辞令を展示しています。他にもノロにまつわる多数の品々が展示されており、その中には祭祀で使われた白装束や祭具を収納していた箆笥に加え、色とりどりの扇が含まれます。これらの扇はノロが神々を呼び、迎え入れるために使っていたもので、扇に描かれた鳳凰（*fenghuang*、日本語では「ほうおう」）と呼ばれる伝説上の鳥は、琉球文化が中国から非常に深く影響を受けていたことを示しています。

神に話しかける

ノロは権威ある地位でしたが、ノロの暮らしや生活環境は集落の他の人々と変わりませんでした。ノロは結婚して子供を産むことさえもできました。祭祀の日には白装束をまとい、主に女性であった補佐役たちとともに、集落を代表して神々に祈りました。奄美の島々が九州南部の薩摩藩の支配下に置かれた後は、薩摩藩が琉球王府に代わってノロを任命しましたが、1879 年に琉球王国が崩壊した際、公的なノロ制度は廃止されました。今日開催されている島の祭りの多くでもその影響が感じられるほど、ノロは集落の暮らしにおいて中心的な存在でした。島の年配者は、何世代にもわたって伝え継がれている何人かの伝説的なノロたちの恐るべき力について語ります。

シャーマンの伝統

女性霊媒師、またはシャーマンであるユタは、よくノロと混同されます。ユタは王府の行政の一部ではなく、独立した存在でした。ノロが集落の安全と繁栄に焦点を当てていたのとは異なり、ユタは霊媒師として神々の意志を個人に伝えるスピリチュアルカウンセラーに似た役割を果たしていました。憑依されたユタは、しばしば精霊の依代となった自身の状態を示す仮面をつけていました。奄美大島には今でもこの伝統の名残が自宅で顧客に対応する占い師という形で残っています。